

大正西曆

スニ至ルヲアリトモ其原由ハ決テ中介ヲナシタル
ヨリ起ルニ非ラス全ク別異ノ趣意ニ出ルモノトス
前條ニヨツテ考フルニ米國ニテ中介ヲナスヘキ條
約ヲ結ヒシハ獨リ支那ノミナラス其他數ヶ國アリ
トイヘトモ其中介ヲナスヘキ約アル國ト會盟ノ約
ヲ立タルニ非サル事毫モ疑ヲ容サルナリ其故ハ右
會盟ノ約ヲ立其處置ヲ施ス如キハ我舊例ニ背キ且
我國ニテ遵行スル處ノ律法ニ反スレハナリ

イ、スミス 外務

四月廿三日 五年

清國修好條規中妥當ナラサル者訂正ノ議ス

外務省局

柳原少辨務使清國へ出發後修好條規第十五條其外
ノ條件ニ付候廣々別紙ノ通取調先月廿九日付ヲ以
中遣候尤郵船便差懸リ委限追加照會書等取調候間
合無之ニ付押印致シ白紙ノ儘差立上海ニ於テ右文
按取調候様中遣候處今般柳原等ヨリ未翰有之ニ
先月廿九日天津へ著船相成候旨ニ候然ハ右ノ書信
上海ヨリ天津へ達ニ同所ヨリ中越候ニハ懸隔ノ地
日間七遠可有之候間別紙相添先此段中進置候也
廿三日 外務

猶々委限追加照會文等差懸次第入御覽可中候也

九
野
雜
冊

柳原少將務使、通達外務省

修好條規第十五條ノ儀先便電信ヲ以中入置候。并御承知ト存候右ハ此程字佛公使ト應接ノ御清國條約ニ心付ノ願忠告不審ノ願質問等有之節心付猶又萬ト勘考候處他條ニモ不適當ノ處違々心付支々左ニ申入候

一第十五條此箇條中平時云々ノ一段甚難解候其故ハ平時トハ即チ戰時ニ對スル文字ニテ既ニ平時ト云ハ戰時ノ條規ニ非ス隨テ局外中立ノ儀ニモ當ラス此條々併セ掲ヘキ筋ニ無之儀判然ニ候併シ此平時ト云ノハ甲國ハ兵ヲ用ル時ナルモ乙國之ニ關セナル時ハ乙國ハ則チ平時ナリト云説モ可有之哉ニ候一此究竟平時於テ許サストイハ戰時ハ之ヲ許

ニ徴アリテ文字根據ナラス殊ニ前段貿易米船隻ノ出入ヲ止メ云々トノ儀モ其意唯損傷ヲ受テフシムルニ止マレハ是又中立ノ儀ニモ當ラス假令此約ヲラサルモ封港ヲ要スル時ハ船隻出入ヲ止メ貿易ヲ止メサルヲ得サルノ事時有ルヘシ故ニ此條全ク刑去ノ善トス

一第十七條結尾ノ兩國書齋云々此段自ラ別事ニテ上文ト相關涉セス是ニ掲ル甚ク不可ナリ既ニ我税則中無税品ノ部板本ノ一節アリ故ニ通商章程ニ掲ル猶可ナリ宜ク是ニ刑去ルヘシ

一第十三條中倘此國人民在彼國聚衆滋擾數在十人以上云々此條ニ據レハ數在十人以上時ハ則チ好シ若シ十人以上ナレハ舍テ問ハサル者ニ似タリ甚ク

本文頁五

此類

謂一ナシ五ノ改正ノ議ニ數字以下六字ノ刪ルヘシ
右前一條ハ全ク廢棄シ後ニ條ハ改正候方可然ト議
定候ニ付不取敢此段相違候尤照會并委限追加トセ
文按等不都合無之様前段ノ意ヲ以テ取調為可有之
白紙へ押印イタシ差廻候間可然御取計可有之此段
申入候也 三月廿九日

外務大臣

十二

十一月十九日 五年

外務大臣副島種臣へ勅旨

爾種臣外務ヲ總理スルノ全權ヲ以テ清國ニ適キ條約
ヲ互換セヨ前ニ使臣柳原前光ヲ遣シ議在セシ事宜ハ
一々照辨シテ可ナリ今清帝婚儀已ニ諧ヒ且政ヲ親ラ
セントスト聞ク朕當ナニ書ヲ送り賀ヲ伸フヘシ爾種
臣其之ヲ致セ欽哉

副島外務卿伺

御用有之清國へ被差遣候ニ付テハ左之通隨從被命
度候可然候ハ、内達仕置候様可致候
外務大丞柳原前光 外務少丞平井希昌
外務少丞鄭 永寧 領 事井田 謙
判仕 官一人 漢語生徒之内兩人

十三

大文頭